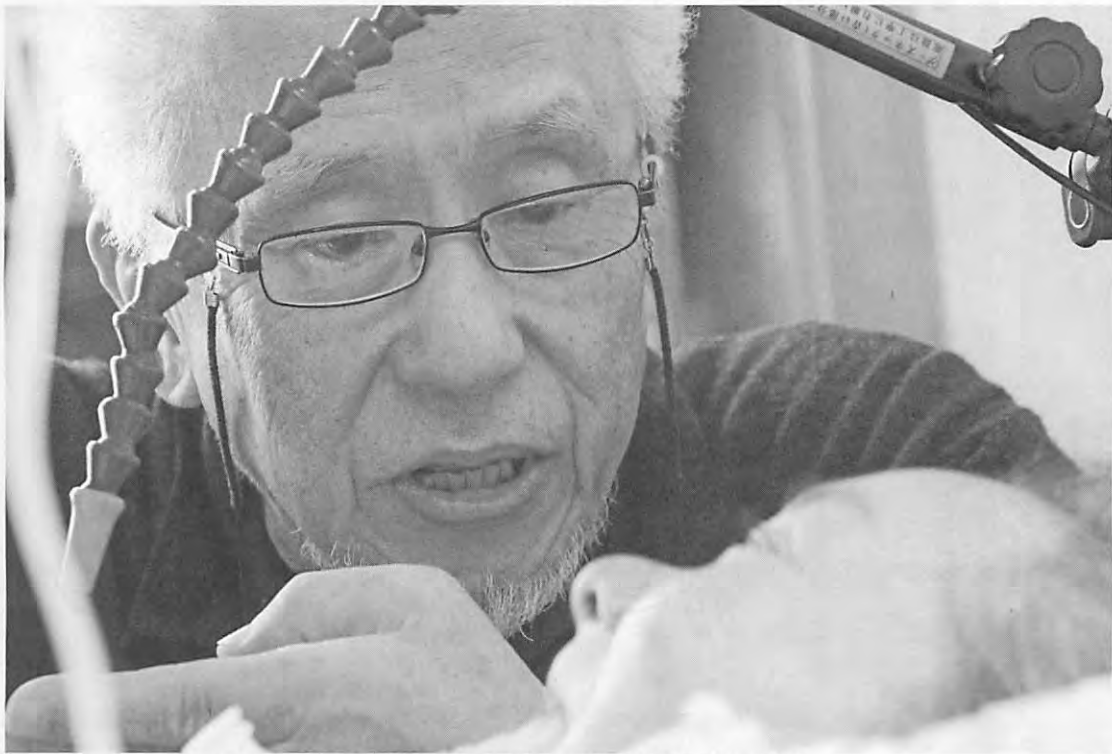


全身マヒの妻を支え続けて

松尾幸郎

まばたきで紡ぐ 夫婦の会話

構成◎柳原三佳／ノンフィクション作家



病室で、妻・卷子さんの目を見つめながら語りかける幸郎さん

プ シュー、プシューと規則正しく響く人工呼吸器の音。小さな病室の中で、まばたきだけをたよりに声なき会話を続けてきた夫婦がいます。富山県に暮らす松尾幸郎さん（76歳）、妻の卷子さん（69歳）です。穏やかな老後を迎えるはずだった2人の人生を一瞬にして変えたのは、7年前に起きた交通事故でした。

幸せの絶頂から 突き落とされた瞬間

私たち夫婦が20年ぶりにアメリカから帰国したのは2001年、私が65歳、妻の卷子が57歳のときでした。仕事の都合で、人生の大半をニューヨークで暮らしてきましたが、退職と子どもたちの独立を機に、老後は2人の故郷である富山でゆっくり過ごそうと計画していたのです。もともと茶道や俳句が好きだった卷子は、日本に戻ってきてからさらに趣味の世界を広げ、毎日楽しそうに生き生きと過ごしていました。

そんな私たちに待望の初孫が生まれたのが、06年5月。娘夫婦はアメリカ・ミズーリ州で暮らしていたため、私と卷子は喜び勇んで飛行機に飛び乗りました。それから3週間ほど、生まれたばかりの孫を囲んで過ごした時間は、まさに幸せの絶頂で

した。わずか数日後に、すべてが崩れ去ってしまうなんて、誰が想像できたでしょうか。

その知らせが入ったのは、7月1日のことでした。私は仕事のためしばらくアメリカに残っていたのですが、滞在先のホテルで朝食を取っていたとき、突然、娘から携帯に電話がかかってきた。泣きながら話すので、「孫に何かあったのでは」と思いました。ところが話を聞いてみると、一足先に富山に帰っていた卷子が大きな交通事故に遭い、危険な状態だということです。

くわしい情報がつかめないまま、すぐに日本に向かいました。当時は息子もアメリカに住んでいたのですが、成田空港で合流。3人揃って富山の救急病院に着いたのは、事故から3日後の午後でした。

集中治療室で見た卷子は、それまでとは何もかもが違っていました。髪の毛は剃られ、顔が大きく腫れ上がり、人工呼吸器などたくさんのパイプが体に取りつけられていて……。その姿を見た瞬間、私は直立不動のまま、声を上げて泣きました。手渡されたカルテには、脳挫傷、外傷性くも膜下出血、両下腿多発骨折など、

これでもかというほど多くの傷病名が書かれていた。そして、医師から宣告を受けたのです。「仮に命が助かっても植物状態はまぬかれないでしょう」と。

しかし、事故から2週間後、卷子が奇跡的に目を開けたのです。意識はほとんどありませんでしたが、胃ろう、頸椎固定など、命をつなぐためにいくつもの手術が施されました。その後、3カ月が過ぎて急性期を脱して安心したのもつかの間、今度は病院から転院を迫られたのです。しかし卷子には、人工呼吸器のほかに横隔膜ペースメーカーという特殊な器械が体内に埋め込まれています。そのため、なかなか引き受け先が決まらず、途方にくれました。

なんとか見つけた病院は、自宅から車で往復2時間以上。冬は雪が降り、負担がさらに大きくなります。やむをえず、8カ月後、卷子の甥が院長を務める精神科病院に頼んで個室に入れてもらうことになりました。私はこの場所を、卷子との「終の棲家」にする覚悟を決めたのです。

それからほぼ毎日病室へ行き、卷子の隣で半日を過ごしました。そばにいて時間を共有すれば、卷子の

つらさが和らぐのではないかと思っただけです。かろうじて動くまぶたから、イエス・ノーの意思程度はなんとか読み取ることができましたが、知能レベルがどこまで回復しているかは定かではありませんでした。

妻の余命は44年だと主張してきた損保会社

事故を起こしたのは、1カ月半前に免許を取ったばかりの19歳の少年だった。刑事裁判で彼に下されたのは、禁固2年執行猶予4年の有罪判決。それは、少年が刑務所に行くことなく、普通の暮らしが送れることを意味していた。「あまりに刑が軽すぎるのではないか」—— 幸郎さん



初孫を愛おしそうに抱く卷子さんの隣で、幸郎さんも幸せを噛み締めていた(写真提供◎松尾幸郎さん)

はやり場のない思いに苦しめられた。

彼は居眠り運転でセンターラインをオーバーし、卷子の車に正面衝突。卷子にとってはまさに不可抗力の事故です。もちろん、交通事故が故意ではなく、殺人や傷害といった犯罪とは違うことも頭の中ではわかっているつもりでした。しかし、この先回復する見込みがない卷子の状態を見るにつけ、少年への刑事罰はあまりにも軽すぎると感じました。

そして、どうしても許せなかったのは、損害賠償を求めたために起こした民事裁判での加害者側代理人(損保会社)の主張です。彼らは、卷子のように寝たきりとなった患者の平均余命は44年で、5年を超えることとはない。だから、入院費や介護費用はそれ以上算出する必要がないと主張してきたのです。

卷子が事故に遭ったのは62歳。本来ならば、女性の平均余命まであと20年以上あるはずでした。少年は刑事裁判で「自分に全責任がある。できるだけ被害者に償いたい」と言っていた。ところが、民事裁判では代理人である弁護士が、まったく逆のことを言うのです。いったい、人の命をなんだと思っているのか。卷子は、自分に何の落ち度もない交通事故で大きな傷を負ってしまったとい

まつお ゆきお 1933年富山県生まれ。貿易業に長く従事し、20年以上アメリカに滞在。交通事故で全身まひとなった妻・卷子さんの介護を続けるかたわら、

事故被害者の現状や命の尊厳を伝えるために講演活動を行っている。



1991年、アメリカ在住時代に撮影した家族写真。現在、娘・美樹さんはアメリカ、息子・幸哉さんはタイで暮らしている(写真提供◎松尾幸郎さん)

うの……。結果的に、4.4年という相手の主張は却下されましたが、判決が出るまでの2年間は、地獄の苦しみというほかありませんでした。

「まみいをころしてください」

意識が戻り始めてから、巻子はさかんに唇を動かすようになりました。本人としては何とか話をしたかったのでしょう。しかし、全身マヒのため声帯の機能を失い、自力では口と鼻を通して呼吸をすることもできないので思うように声が出せません。唇の動きを凝視しても、本人が何を言いたいかわかってやれない。巻子の姿を見てみると、毎日胸が張り裂ける思いでした。

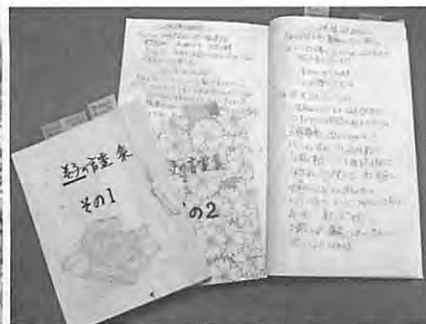
そこで、事故から2年9ヵ月後の09年3月、作業療法士の勧めもあり、

障害者用の会話補助器を使ってみることに。入力したい文字が光ったときにスイッチを押すことで文章を作成できる、「レッツ・チャット」という機械です。実は、2番目に入院した病院でも挑戦はしたのですが、体のどこでスイッチを押すかがネックとなり、諦めていたのです。

巻子は全身マヒ状態ですから手も足も動きません。かろうじて自分の意思で動かせるのは、まぶたと口元だけ。このときは、手押し式、足踏み式、頬で押すタイプなど、いろいろなスイッチを試してみましたが、どれもこれもうまくいきませんでした。

もうだめか、と諦めかけたとき、「本人がスイッチを押せないのなら、私が代わりに押せばいいのではないか」と気がついたのです。つまり、巻子がまぶたをパチツとしたら、私

がスイッチを押すという方法です。早速練習を始め、最初に家族の名前、次に年齢をたずねてみました。まず、「あかさたなはまやらわ」の列から一行を選ぶ。次に、たとえば「あ行」なら「あ、い、う、え、お」と順番に光っていくので、選びたい文字が光ったときにスイッチを押す。そうやって1文字ずつ決定していくため、わずかに数文字を綴るだけでも相当な時間がかかります。しかし、



レッツ・チャットで交わした会話は「巻子の言霊集」と名づけたノートに記録(撮影◎本誌編集部)

巻子は文字盤を凝視し、根気よく文字を拾っていききました。そして、すべての質問に対して正確に答えることができたのです。驚きました。巻子は意識も記憶も、はっきりしていたのですから。嬉しさがこみ上げる半面、後悔の念も押し寄せました。事故から2年9ヵ月間、なぜこの方法にもっと早く気づいてやれなかったのか。巻子にはきつと、伝えたい思いが山のようにあつたはずだと――。

それからは、レッツ・チャットを使って、時間の許す限り会話を楽しました。4月に入ると、「ゆきおさんを にほんいち あいして います」、そんな言葉をかけてくれるまでになったのです。

しかし、その3日後、巻子は真剣な表情をしてこう綴りました。「まみいをころしてください」「まみい」とは、巻子自身のことです。アメリカで長く暮らしていたため、私たちは互



幸郎さんは夫婦2人の墓を購入した。「あの世でもずっと一緒だよと言うと、巻子にはっこり笑ってくれました」

いを「マミー」「ダディ」と呼び合っていました。私は、震え出す体を抑えながらナースコールを押していました。院長の判断もあり、そこで

「ゆきおさんを
にほんいち
あいしています」
(卷子さん)

「残り少ない人生を
お互いにもう少し
頑張ろう」と
語り合っています
(幸郎さん)



事故発生以来、幸郎さんが約7年間通い続けている病室が2人の“終の棲家”。静かな時間が流れるこの場所には、家族の写真がたくさん飾られている

会話は中断。その夜は、なかなか眠ることができませんでした。
翌日、なぜあんなことを言ったのか話してほしいと伝えると、卷子はこう答えたのです。
「あなたのねんれいで、まいにちがよゆうがありますか。ごくろうですきをつけて」
しゃべることも、食べることも、寝返りを打つことも、呼吸をするのとさえ自分でできない卷子が、このような状況に置かれてなお、私のことを気遣ってくれている。卷子の頬を掌で包み、私は言いました。
「俺は死なない。どんなことがあってもお前を守ってやる。心配するな。俺はこれから語り部になる。でもお前がいなければ、そんなことをする元気も出てこないんだ。だから死にたいなんて言うな。もうしばらくこの俺につき合ってくれ。いいか？」
卷子は私の目をしっかりと見つめながら、パチパチとまばたきを返してくれました。

命を終える瞬間まで語り続けたい

2人の体験談は10年に書籍化され（『卷子の言葉』）、昨年はNHKBSでドキュメンタリードラマも放映された。幸郎さんは現在も卷子さんの看病を続けながら、交通事故の悲惨さや命の重みを訴える講演活動を行っている。12年6月には、スイスで開催された世界尊厳死大会でスピーチを行った。

3年前に、私はすい臓腫瘍の手術を受けています。十二指腸と胆のうも切除する大手術でした。このときから、自分のほうが先に死ぬかもしれないという不安が現実味を帯びてきたのです。
もちろん、卷子が生きている限りそばにいて彼女を守るつもりです。しかし、私が先に死んだら、誰が卷子を支えてくれるのでしょうか。いつそのこと、私が死ぬときに人工呼吸器のパイプも一緒に抜いてやったほうがよいのだろうか……。そんなこ

とばかりが、毎日頭の中をぐるぐる回っています。

間もなく、事故から7年になりますが、卷子はあの日からずっと、病室の天井を見つめたまま入院生活を続けている。このような“生かされ方”を強いられる卷子を間近で見ながら、生きるとは何なのか、これほど残酷なこと、非情なことがあつてよいのか、問い続けてきました。自分らしく、尊厳をもって生きる。尊厳をもって老いる。そして尊厳をもって死ぬ。死ぬということは「自分らしい生き方を貫く」ことであり、「品格をもって人生を締めくくる」ことではないかと思うのです。

私たちは今、精神的に極限の状態に置かれています。しかし、だからといって自らの意思で人生を終えることは、今の日本では許されていません。ならば、最期のときを迎えるまで、できる限り多くの方々に私たちの体験を語り、一緒に考えていたいただきたい。今、卷子とは、「それを残り少ない人生の生き甲斐にしよう、お互いにもう少し頑張ろう」と語り合っています。

やなぎはらみか 交通事故、司法問題などを長年にわたり取材。松尾夫妻の半生をまとめた『卷子の言葉 愛と命を紡いだ、ある夫婦の物語』のほか、『遺品 あなたを失った代わりに』『家族のもとへ、あなたを帰す』など著書多数